川勝平太さん講演

「日本哲学」のパイオニア

かわかつ・へいた　1948年京都市出身。早稲田大学院修了。専攻は比較経済史。早稲田大教授、日文研教授、静岡文化芸術大学長を歴任。2009年から昨年まで静岡県知事を務めた。著書に「日本文明と近代西洋」「文明の海洋史観」「日本の中の地球史」のほか、猛さんとの対談「日本思想の古層」がある。

森と共存した縄文文化、地上の全てに仏が宿る

日文研の元教授、川勝平太さん（76）は座談会で「梅原哲学の射程」と題して講演した。猛さんを「学問の世界に『日本哲学』という新しい分野を開いた哲学者でした」と評した。

西洋の学問への異議という点で自然科学の分野で同様の態度を打ち出した例として、川勝さんは京都大名誉教授を務めた今西錦司（1902～92年）の「自然学」を挙げた。「今西進化論は、ダーウィンが唱えた適者生存と自然淘汰の進化論に対し、全ての存在は元は一つで類縁関係にあるという『棲み分け』を突きつけた。

川勝さんは「今も梅原さんも学者としては異端であり孤高とみられがちだが、どちらも孤立していない」と強調した。今西翁下には民族学者・梅棹忠夫さん（1920～2010年）ら一流の学者群が連なり、猛さんには日文研に集った面々がいると語った。

『日本哲学』の成果は膨大。猛さんの著作集は計40巻に及び、その後も多くの著作を残した。

ただ、猛さんの20代後半は進むべき道を模索して苦悶する日々だった。そんな時、4歳年上の哲学者で京大教授を務めた上山春平さん（1921～2012年）の影響が大きかったと川勝さんは振り返った。

「上山さんの教示で梅原さんは空海の真言密教に開眼し、不安・絶望の哲学から笑いの哲学を媒介にして仏教の微笑に接し、生命の哲学へと脱皮していった」

猛さんは上山さんとの共同企画で「仏教の思想」全12巻をまとめ、44歳で立命館大を辞職。そこから「古事記」や「日本書紀」など古典籍に研究対象を移し、代表作「古代3部作」が結実する。それは上山さんの「哲学3部作」と同時期だと川勝さんは語り、「二人三脚で日本国家の成立の深層を具体的・哲学的に解明した」と話した。

日本の哲学を研究する機関がアカデミズムにはない。上山さんとの対談でそう語った猛さんは日文研創設に動いた。フランス文学者で京大人文科学研究所の所長を務めた桑原武夫（1904～88年）らとともに当時の中曽根康弘首相に直談判し、87年に実現した。

同時に2人が先に見つめていたのは文明という視点だった。その思想的転機は「叙事詩ギルガメッシュ」。シュメール王であるギルガメッシュが森の神を殺害する物語と出合い、自然を破壊する西洋文明という認識を深めた。猛さんは日文研創設の翌年、戯曲「ギルガメシュ」を発表。そこから、森と共存した縄文文化と出合い、地上の全てに仏が宿るという「草木国土悉皆成仏」の思想に至る。

「日本には人類の知的遺産がしっかりと根づいている」。東洋の仏教や儒教、西洋の自然科学が絡み合い、重なっていると川勝さんは評した。「今日の日本は人類が生んだ知的資産のいわば『正倉院』。つまり『知の正倉院』と言える。だからこそ『梅原日本学』は世界性を持っている」

座談会で語る手前から川勝さん、山極さん、賢一郎さん、小西さん

「冬眠文化」再考を　座談会

座談会で山折さんは、クマが出没するニュースから語りおこし、「動物の世界のみならず、人間社会でも『冬眠文化』が崩壊し始めているのでは」と提起した。

「日本人は長い間、『冬眠文化』の中で生をつなぎ、森を守り、社会の秩序を守ってきた。『冬眠文化』の底にあるのは休息を取り、激しい労働をやめたり縮小したり、コントロールしながら生きていく。生き残るための能力だった」

しかし、文明は逆の方向へと進んできた。「ＡＩが出現することで人間は余暇を手に入れられると言われたが現実はどうでしょう。私たちは『冬眠文化』を見直すべきではないか」

これを受け、賢一郎さんは「もはやこれまでのように発達とか上昇とかということは期待できない時代。従来の思考から抜け出る必要がある」と応じた。

山極さんは、寒冷地では冬季に家にこもり、余暇や新たな知恵がはぐくまれたと指摘。『江戸時代には隠居制度があり、年を重ねると花鳥風月や趣味に生き、笑いの多い人生を送った。今は年を取っても、冬眠できないクマのように権力にしがみつく人が多い。社会の隙間が狭まっている。花や風景をめでるような感性を見直すべき」と提案した。

「春夏秋冬の中で特に京都では自然との接し方が豊かになった」と川勝さんは呼応した。「西洋では神が理性へとつながり、自然科学に実を結んだが、日本では仏が仏性になり、さまざまな芸術を生んだ。そこに注目した梅原さんの思想が手掛かりになる」

進行役を務めた京大人と社会の未来研究院の小西賢吾特定准教授は「私は梅原さんの孫世代にあたる」とした上で「借り物ではない、人間らしい部分から発せられた言葉の本質を受け継いでいきたい」と結んだ。

山極寿一さん講演

西洋の「力」、対する「慈悲」

やまぎわ・じゅいち　1952年東京都出身。京都大教授、京大総長を経て現職。ゴリラ研究の第一人者で霊長類の調査研究から人間社会の由来と未来を探る。著書に「家族の起源」「父というあがなもの」「暴力はどこから来たのか」「『ザル化』する人間社会」など。

人類は闘争しあう存在ではない

京大の元総長で総合地球環境学研究所（左京区）所長の山極寿一さん（73）は「人類哲学のゆくえ」と題して語った。

猛さんは西洋文明を「力の文明」、日本の文明を「慈悲の文明」と呼んだ。「梅原さんは日本の文明に縄文的文化、そして美と浄の文化を見いだした」

狩猟採集文化の縄文を米作の弥生文化が駆逐した。そう考えられがちだが「実は融合した」。山極さんは、米作の長江文明が中国から海を渡って日本にたどり着き、縄文文化をつぶすことなく文化を築いてきたと指摘し、「森と水を絶やさない文化を基調としていることを梅原さんは喝破したと評価した」。

しかし、西洋の「力の文明」は文字通り、森と水を破壊する方向へ進んだ。

「人類は直立二足歩行で熱帯雨林を抜け出し、大きな進歩を遂げた。そこからずっと、弱みを強みに変える戦略で生き抜いてきた。食糧生産が始まって文明が起こり、強みをさらに強みに変えるという戦略に転じてしまった。これが大きな間違いだと思っています」

ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザ攻撃…。令和の時代を迎えても戦争が絶えない。しかし、人間は実は闘争が本性ではなく、利他という精神で助け合うのが本質だという見方が近年、注目されていると山極さんは語った。「戦争解決には勝つか負けるかの二元論しかないと政治家は思い込んでいるようですが、人間が常に闘争しあう存在であるという認識を見直す必要がある」

技術革新は起こるべき進歩を続ける。自然科学は人間の体を物質と見立てることで医学、物理学、数学が発展し、人工知能（ＡＩ）の時代を迎えた。

「果たしてそれで良かったのか。今西は『我感じるゆえに我あり』と言った。認知する前に感じることがなければならないだろう。身体が先で心は後。そうした思想に立ち戻らないと、この世界に人間が同じ生物ともに住んでいるという意識は生まれてこない」

猛さんは晩年、人間中心主義を超えるため「西洋文明に偏らない『人類哲学』を提唱した。『戦争は、食糧生産が始まってから生まれた最近の行為。人間の700万年という進化のうち、わずか1万年に過ぎない。お互いに助け合うという本性の上に社会を築いてきたことに立ち返って『人類哲学』を浮かびあがらせないといけない」

梅原記念財団が創設する「梅原猛人類哲学賞」の選考委員長を務める。「人類という視点から考え直すような人を表彰することで世の中を変えていく動きにつながれば」

京都新聞社 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

©京都新聞社　無断複製・転載を禁じます